

STAR OCEAN anamnesis -The Beacon of Hope-

[Novel] 和ヶ原聡司 [Illust] 大熊まい



第二章・蝕まれた惑星・前編

「亜空間ワープドライブ解除。間もなく目標の惑星の衛星軌道に到着します」

艦橋に響き渡るコロの声にはつと顔を上げると、ちょうど正面スクリーンには青い海と緑の大地が広がる美しい惑星の映像が展開されていた。

私は、数秒ではあるがその惑星に見入ってしまう。

「地球にそっくりですね」

すると、青年の声が私の内心を代弁してくれた。

視線をそちらにやると、青い髪をした剣士の青年と目が合った。

「まだ僕は知ってる星が少ないんで、似ている気がしたんです」

少しだけ照れくさそうに言う彼の名は、フィデル・カミューズといった。

遠慮がちにそう言う彼に、私は同意した。

銀河連邦軍人という立場上、様々な惑星を見てきた私だが、目の前の惑星は際立って地球に似ている印象を受けた。

同時に表示された恒星からの距離を見ても、ハビタブル惑星であることが伺え、ますます地球に近いという印象を強くする。

「フィデルさんの言う通りですね。地軸の傾き、赤道面直径、土壌や海洋の主要成分、大気の状態など、地球に似た要素が多い星です。何故か陸地部分にセンサーが届かない地域があるのですが……まだ外部センサーに異常が残っているのでしょうか」

そしてコロのダメ押しだ。

自分の印象は間違っていないかった、という思いが一層強くなった途端、異なる意見が正面のオペレーター席から飛んできた。

「不思議ね。私は地球に似てるとはとても思えないんだけど」

艶やかな声色とともに振り向いたのは、鮮やかな紅色の髪と長い耳介が特徴の女性。

名を、ミュリア・ティオニセスという。

「私の知っている地球はもっとくすんだ灰色よ。水や緑が豊かってイメージでは無いわね」
ミュリアは地球について、そんなことを言い出した。

私とフィデルとコロは思わず顔を見合わせる。

我々三者の間で地球が灰色、という印象は無いと意見の一致は見られるが、ミュリアは構わず続けた。

「それと、センサーの稼働状況は正常よ。少なくとも前の惑星ではきちんと衛星軌道上から惑星全体をスキャンできたでしょ。センサーが届かないのは惑星上の一部地域だけだから、別の理由があるんだわ。本当に降りるの？」

その問いに、私は一瞬だが答えるのを躊躇した。

言いたいことはよく分かる。

衛星軌道上からセンサーが届かない地域があるということは、惑星の文明レベルや未知の生物、植物などの危険を十分に察知できていないということだ。

「私の友達の話だけど、移民のためにハビタブル惑星を開拓するって勇んで乗り込んで、センサーが捉えられなかった昆虫型の原生生物に調査隊が半壊させられたってことがあったわ」

「こ、怖いこと言わないでくださいよう」

ミュリアの話に一番怯えた声を出すのはコロだ。

「艦長どうされます？　蟹に続いてビッグな蜂とか、熱されて弾ける木の実とか、意志を持った巨大調理器具とかに攻撃されたら……」

妙に具体的かつ意味不明な脅威を推定するコロは無視し、私はもう少しだけ考える。

「降りられるなら、降りた方がいいと思います」

すると、フィデルがそう意見を具申してきた。

「この惑星には水がある。ここで最低限の補給をするべきだと思います」

水。確かにそうだ。

G F S S 3214 Fに搭載されている水が3ヶ月分という計算は、私一人分だけの計算だ。既にこの艦には私、フィデル、ミュリア、そしてもう一人。

計4人の人間が乗っているのである。

「着いたんだ」

そのとき、艦橋の出入り口のドアが開き、最後の一人が姿を現した。

金色の長い髪と、不思議な色の瞳。見たことの無い装束をまとった女性。

「バイタル正常。体調は良さそうですね」

コロが女性の足元にすっと近寄り、彼女を見上げる。

「個体名、イヴリーシュさん、でしたよね」

コロにそう呼びかけられ、女性は小さく頷き、少しだけ身を引く。

するとコロが、その動作に驚いたように跳ね上がった。

「どうしましたか！？　立ちくらみですか！？　関節痛ですか！？　低血圧ですか！？」

「だ、大丈夫、ちよつと離れてもらえる？　寝起きにあんたの顔は結構インパクトが……」

ああ、なるほど、それは納得できる。

「気持ち分かるわ。くだいわよね。その子の顔」

こちらを振り向きもせずに言うミュリアも同意見のようだ。

「僕ほどの機能美溢れるインターフェースになんて……艦長もミュリアさんもイヴリーシュさんもヒドイです……！」

「コロ。大丈夫だ。僕はそこまで酷いとは思わないから、自信を持つんだ」

「……フィデルさん……慰めてもらっているようで結局けなされてるように聞こえるのは僕

の気のせいでしょうか」

「えっ？ い、いや、そんなつもりはないんだが……ごめん」

じつとりとしたコロの恨み節に、誠実そのものの性格をしているフィデルは逆に狼狽えるが、私も少しだけコロに同意したのは秘密だ。

「と、とにかく、ありがとう。あたしはリーシュでいいよ。改めてよろしく」

「こちらこそよろしく、リーシュ」

「よろしく。何だか長い付き合いになりそうな気がするわ」

「では、個体名『リーシュ』で再登録しておきますねー……」

フィデルとミュリア、そしてまだうじうじとしているコロがそれぞれに頷き、私も彼女に向かつて手を差し出し握手をする。

この艦にいる全員が艦橋に集まったところで、確認しておくべきことがあった。

「まだ、記憶は戻りませんか？」

コロがリーシュにそれを問うと、彼女は明るく美しい顔を微かに曇らせ、申し訳なさそうに俯く。

足元から上ってきたコロの気づかわしげな声に、リーシュは小さく首肯した。

「ごめんなさい。なんであんな惑星にいたのか、なんであんな紋章術が使えるのか、どこに行こうとしていたのか……頭に靄がかかったみたいで、何も思い出せないの。名前とか、あとは机とか椅子とか食べ物とか、そういうことは分かるんだけど……」

全てが奇妙な話だった。

「いいんです！ 旅は道連れ、世は情け！ 記憶が戻るまで、旅に同行いたしましょう！」

コロの、機能美溢れるインターフェースの中から異様にマッチョな腕と昆虫のような細い足が出現し、力こぶを作って見せる。

足があったのかとか、このとんでも造形を乗員メンタルケア駆動素体として運用することにゴーサインを出した責任者出てこいとか色々なことが脳裏をよぎったが、ここでは口には出さない。

「宇宙を旅していれば、色々なものを見るんじゃないかな。そうすれば何かを思い出すきっかけがあるかもしれない。気を落とさずに、自分のペースで行こう」

コロの後を継ぐようにフィデルが真っ直ぐに彼女を元気づけ、リーシュもようやく笑顔を取り戻した。

「ありがとう。でも、お世話になるばかりじゃ申し訳ないわ。あたしもこの紋章術があれば、人並み以上には役に立てると思うわ。できることがあったら、何でも言って」

元よりこちらもそのつもりだ。

だが、リーシュの言う『紋章術』が一体何なのか分からない内は、彼女にあまり大きな負担をかけない方が良くだろうと私は考えていた。

少なくとも問題の紋章術のせいで、彼女は先程までずっとメデイカルカプセルの中に入りっぱなしだったのだ。

一体どのような原理なのかまるで分からないその紋章術の起こす奇跡。

それは、フィデルやミュリアのような『人間』を召喚するものであったからだ。

※

巨大蟹を撃退し、リーシュを保護した岩と砂の惑星で、モーフィスの戦士と名乗るミュリアに、GFS S・3214Fの修理を手伝ってもらった。

ミュリアは細身ながら外部センサーとスラストの破損の修理を手際よくこなしてくれて、実質私が手を出した部分はほとんど無いと言ってよい。

何故初めて見る艦の修理ができるのかと問うと、

「少人数で宇宙を飛び回る生活してたから、即席で何でもやれないと生き残れないのよ」と謎めいたことを言い出した。

修理が終わると、襟元のデバイスからコロが、

『スバラシイです！ まるで頭の靄が晴れたような気分です！ これで僕はあと十年は戦えます！ 早速艦と星全体をスキャンして異常がないかどうか確認しますね！！』

と、喜びの叫びを放つ。

修理の片付けをしていると、艦内にリーシュを運び込んでくれたフィデルが顔を出した。

「メデイカルマシンの診断では、大きな怪我や病気は無いそうです。疲れて気を失ったんだろうってことでした。しばらくは様子見ですね」

「そう、大したことないなら良かったわ。あなたは大丈夫？ さっきの蟹のせいで、怪我とかしてない？」

「大丈夫です。あの程度ならさほどのことは。ああ、剣を磨ける道具があれば、後で貸していただきたいと思います……」

最後は私への申し出だったが、もちろん私にそれを拒むつもりはなかった。

それよりも、もっと根本的なことを知リたかった。

フィデルとミュリアの二人は、まさかとは思うがこの星の人間なのか、と。

すると、二人から帰ってきたのは否であり、この星の人間であるよりも衝撃的な答えが返って来たのだ。

「言ったでしょ。私はモーフィスの戦士。生まれはEn II【イーエヌツー】よ」

「僕はフェイクリードという星の出です。つい最近連邦に加盟したばかりなので、御存知ないかもしれませんが……今は銀河連邦軍の士官候補生として勉強をしています」

En IIという星の名は、昔連邦史の授業で習ったような気がするが、私の記憶を大きく刺

激するものではなかった。

それよりもフィデルがフェイクリード出身の銀河連邦軍の士官候補生であるという事実が、私とコロに大きな衝撃を与えた。

銀河連邦軍人であれば、二年前のクロノス事変のことを知らない人間はいない。

連邦全域を揺るがしたあの事件の主な舞台となったのが、他ならぬフェイクリードなのだ。それまで未開惑星と目されていたフェイクリードには、連邦の最新紋章科学を凌駕する技術が培われていた。

クロノス事変の過程で明らかになったその事実は、連邦上層部の肝いりでフェイクリードを即時監視対象惑星に指定したことからも、過去の銀河史に例を見ない出来事だった。

クロノス事変における首謀者、アルマ將軍を排する作戦に大きく貢献したフェイクリーダーイアンが、何名か先行留学生として銀河連邦の軍属になったというニュースは聞いていた。目の前の青年が、その中の一人だとも言うのだろうか。

そして何故そんな人物が、コロの宙図にも記録されていないようなこんな宇宙の果ての惑星で、当たり前のような顔をして存在しているのか。

そのことを問うと、フィデルは少し困ったような顔になって、ミュリアと顔を見合わせる。

「何と言うか……呼ばれた、としか言いようがないんですよね。ミュリアさんはどうです？」

「そうね。私も呼ばれたからここにいるとしか言えないわ。とても大きな力よ。私も宇宙を旅して長いけど、あんな力は初めてだったわ。あなたもそうじゃないの？」

私は……私達は……。

この惑星に来る直前のことを、私はよく思い出せない。

船籍不明艦の攻撃を受け、赤色巨星の引力を利用したスイングバイ加速を用いてワープに突入し、逃亡を図ろうとした。

ワープイン直前に、コロが大きな力を感知したと騒いでいたような気がするが、それが彼らの言う『呼ばれた』ということなのだろうか。

「そして多分、その大きな力を使ったのは……私達を呼んだのは」

ミュリアとフィデルと私の視線は、私のGFS S-3214Fに注がれる。

声に出して確認するまでもない。

巨大蟹に襲われていたあの金髪の女性。

イヴリーシュと名乗る、あの女性だ。

※

「とはいえ、いいの？ この艦の目的地は地球よ。7万光年先で故郷の記憶が戻っても、それこそ帰ることはできないかもしれないわ」

「……それは」

ミュリアの問いに、リーシュは言いよどむ。

7万光年。

それは、リーシュを助けた惑星から飛び立った直後、コロが弾きだした地球までの距離であつた。

宇宙歴539年になつても未だ銀河系の全容を解明するには至っていないが、私達の住む銀河系の直径は約10万光年だと言われている。

地球から7万光年、ということとは、もはや完全に連邦の勢力圏外。

未知の宇宙であり、あるのは連邦の宇宙基地の深宇宙観測望遠鏡から存在が推測される、恒星の位置程度しかデータの無い穴だらけの星系図のみ。

一切の補給なしに移動できる距離ではなく、補給があつたとしても、それだけの距離をこの艦のワープドライブだけで帰還しようと思えば、全く障害が存在しない航路を一直線に進んで50年にかかる計算になる。

単純に私が生きて帰れる保証が無いし、何かの奇跡が起きて帰還できたとき、リーシュの故郷がもし今いる宙域にあつたとしたら帰してやることもできない。

ミュリアの懸念はもつともだし、更に言うと、実は私は言うほどリーシュの記憶が戻っていないわけではないだろうという確信があつた。

その確信から分析して、少なくとも、今いる周辺宙域がリーシュの故郷や目的地ではないことだけは確実だ。

それに、コロも絶望する7万光年という数字を、私はあまり意に介していなかった。

何故なら、私とコロは既に、ごく短い時間でそれだけの距離を飛んでいるのである。

一度出来たことを、二度できない道理はない。

もしフィデルとミュリアの言う『呼ばれた』が、私やコロにも適用されているのだとしたら、リーシュの力は7万光年すら越える可能性を秘めていることになりはしないか。

全く理論的でないのは自分でも分かっているが、戦闘艦一隻分の質量を7万光年旅させることができるなら、それこそリーシュ一人分の質量くらい、方法が確立されれば余裕だろう。

だから今は、リーシュを伴って宇宙を旅しても、問題ないのではなからうか。

そう告げると、ミュリアは肩を竦めて引っ込んだ。

「艦長がそう言うのなら私は構わないわ。ごめんなさいね。キツイ言い方して」

「ううん。大丈夫。あたしも自分が十分不審者だって分かっているから。だからその分働きて、皆の信用を勝ち取っていくわ」

勝気な女性だ。

私は微笑むと、ミユリアとコロに目の前の惑星に着陸するよう指示を出した。

「概算で海面率60%。陸地の森林カバー率70%。人口10万を超える都市はなし。何の面白味もない星ね。文明レベルも高くなさそう」

「はい。ごく初期の内燃機関も存在しない、文明の発展度合が低い惑星のようです。未開惑星保護条約の適用対象と判断します。現地住民に着陸を見咎められないよう、艦に透明艀装を纏います」

コロが着陸シークエンスを順次告げるとフィデルが、

「透明艀装……もしかして今、この宇宙船は外から見えなくなってるんですか？」

と、心なし目を輝かせて尋ねてきた。

私が頷くと、

「そうか……でも、中にいると全然変わらないんだな……不思議だ。それでも外に出たら、見えなくなってるんだよな」

透明艀装に何か思うところでもあるのだろうか。

首を傾げつつも、私はリーシュに適当な席に腰掛けてハーネスを装着するように指示してから、着陸シークエンスの実行を許可する。

「着陸態勢に入ります。全員対ショック姿勢。あつ、そうだ」

艦体が惑星の大気圏に突入して断熱圧縮の衝撃に晒されたタイミングで、コロが思い出したように言った。

「データベースに記録されていない惑星ですので、とりあえずこの星を『惑星メーア』と呼称しますね！」

それは、今このタイミングで言うべきことなのだろうか。

見ろ、連邦艦艇の航行に慣れていなさそうなフィデルが、少し狼狽えているじゃないか。

私がそう思っている間にもどんどんメインスクリーンに広がる大地が近づいてくる。

大気圏に完全に突入し、陸地に着陸した衝撃が艦を大きく揺らす。

「……未知の惑星の探索……なんだか、わくわくするじゃない」

メインスクリーンに広がる広大な森林地帯の映像を見て、リーシュが興奮した声で言うのを、私もどこか楽しみに聞いていた。

未開惑星メーアに着陸した目的は二つある。

一つはフィデルが言ったように、飲用水の補給だ。

不可思議な現象と賑やかなメンバーのお陰で忘れがちだが、我々は現在この広大な宇宙で完全に孤立しており、遭難しているも同然なのだ。

元々乗艦するクルーが深宇宙を探索するのにある程度長い期間生活できるだけの飲用水は

積んであったが、それでも未知の宇宙を旅する以上、貯水率が5割を切ったときに補給できる惑星が近傍に存在しないと乗員の生存率が著しく低くなる。

そして、もう一つは物資の補給である。

これは食糧も勿論だが、それ以上に艦内で必要な道具を生成するための原材料、素材の収集が主となる。

深宇宙探査艦に欠かせないオプションに、レプリケーターと呼ばれる機械がある。

簡単に言ってしまうと、投入した素材を再構成して望みの製品を作り出す便利マシンで、理論上これ一台あれば、自分が乗艦している艦をもう一隻複製することすら可能である。

これだけ聞くとなんでも製造マシンの如き便利さだが、もちろん制限はあり、無条件にいつでも何でも好き放題作れるわけではない。

金属素材ばかり投入したレプリケーターからパンは出て来ないし、有機物だけを投入して鉄製のネジ1本を作るなら、牛5頭分の血肉が必要らしい。

また、一度に投入できる原材料の総量にも限りがあるため、今のところは細かな消耗品やパーツを応急処置のために作るくらいの量があればいい。

取り急ぎ、今必要なのはシールド装置復旧のためのパーツを複製するだけの金属素材と、エネルギー源になる真水であった。

コロ曰く、艦の現在のシールド効率は絶望の一桁代。

航行速度によっては、握り拳大のデブリが衝突しただけで外部装甲が危険なことになってしまうと言う。

宇宙の旅で最も船体にダメージを与えるのは未知の敵の攻撃でも、離着陸の衝撃でもない。人の目に捉えられないほど小さな、だが音速を遙かに凌駕する相対速度で激突する宇宙の塵なのだ。

シールド効率の改善は急務であり、更に贅沢を言えばこの地球に似た惑星メーアで、最低限我が艦の乗員が不自由なく自活できるだけの素材を2ヶ月分はかき集めたいところだ。

ところだったのだが……。

「うう……どうしたことでしょう……地表に降りても、近距離センサーが全く機能しません」
我々の目の前で、コロが弱音を吐きながら泣いている。

「私の修理は完璧なはずよ。あなたが壊れてるんじゃないの？」

不満そうなミュリアに、コロは反発する。

「僕はずっと平常運転です！ 言っておきますがミュリアさんと艦長の修理は完璧ですし僕も完璧ですからどこも壊れてないません！ ですがセンサーが全く機能していないのは間違いないのでこれは壊れていると言えます。壊れていないのに壊れている。壊れているのに壊れていない、艦長、これなーんだ？」

どうして私になぞなぞを出した。正解したら元に戻るのか。

「あたしにはこのAIの情報伝達能力が壊れているとしか思えない」

答えの無いなぞなぞの答えを探すよりは、私はリーシュの意見に同意する。

「どちらにしても、センサーが機能しないのは問題ね。必要な素材の場所が特定できないってことでしょ？」

コロを放置し、私とリーシュは眉根を寄せる。

センサーが動かないとなると、リーシュ達と出会った惑星での判断がもう一度必要になる。

「この広い惑星を無計画に歩き回れって、流石に無茶でしょ」

もちろん、ただ闇雲に歩き回るわけではない。

前回のときは不時着だったが、今回は目的を持っての着陸である。

となれば、ここは連邦軍人らしく軍規に従って行動しなければならない。

軍規、という単語に、コロが反応した。

「あっ……そうでした。艦に不備がある場合の緊急着陸の際は、まず着陸地点周辺の安全を確保することが最重要事項です」

着陸して既に十分が経過している。

着陸の音や風や振動で驚いて逃げた原住野生生物が、そろそろ戻ってきてもおかしくはない時間だ。

モニターに映る森林は針葉樹林のようだが背は高くなく、巨大生物が姿を隠せるような植生でもなさそうだ。

少なくともあの巨大蟹のような怪物は現れないとは思いますが、とりあえず、船の周囲半径百メートルを、私とフィデルで哨戒することに決める。

「ええ！ あたしも行きたい！」

指名されなかったリーシュが文句を言うが、それを止めたのはフィデルだった。

「リーシュは病み上がりだ。そう遠くまで行くわけじゃないから、今は待っていてくれ」

「でも……」

「民間人を守るのは銀河連邦軍士官の務めだ。危険な任務は、まずは僕らに任せてほしい」

フィデルはまだ士官学校に通う身だと言っていたが、その立ち居振る舞いや覇気、誠実な性格から出る言葉は、既に一流の軍人のそれであった。

もしかしたらフェイクリードでも、似たような職に就いていたのだろうか。

今のような言葉が何の銜もなくすりりと出てくるような、多くの人を守るべき立場にあったのだろうか。

「……分かったわよ。でも、気を付けてね」

フィデルの言葉にリーシュは不承不承ながら納得し、

「くれぐれもお気を付け下さい」

「あなた達の力は蟹のときに分かったつもりだから心配はしてないけど、気を付けてね」

コロもミュリアもそれぞれに私達を送り出す。

私はフェイズガンのエネルギーが充填されていることを確認しながら、艦のハッチを開ける。

その瞬間吹き込んできた風は、微かに潮の香りがした。

「不思議だな。星が違っても、海の匂いは一緒なんですね」

フィデルも気づいたようだ。懐かしげに眼を細める。

私は思わずフィデルに尋ねた。

海を見たことがあるのか、と。

するとフィデルは少しだけ私の問いに驚いたような顔をしたが、すぐに笑顔で頷いた。

「僕の故郷は海辺の村なんです。実家がそこで剣術道場をやってて」

故郷の海辺の村。

なんとも雄大な風景が想像される、ロマンあふれる響きだ。

私の故郷、実家は、セクターθ【シータ】の宇宙基地だ。

両親とも銀河連邦軍関係の仕事をしていたため、宇宙基地に併設されるコロニーに実家があるのだ。

宇宙基地の居住区のコロニーの作りは、建造された時代の差こそあれど概ねどこも似たような作りをしている。

宇宙にあるが故の清浄な空気。汚染の無い水。計算された木や草の植生。

全てが人間によって調整された風景しか知らない子供時代を過ごした私には、フィデルのような生まれが少し羨ましく思う。

だが、成長した私はハビタブル惑星の自然環境を求めるのではなく、人工物が支配する最前線の宇宙基地勤務の軍人になっているのだから、三つ子の魂百までなのだろう。

「艦長？」

少し感傷的になってしまったが、今は神すら予想だにしない事態の最中、新たな仲間達とともに宇宙のサバイバル生活に身を投じなければならないのである。

なんでもない、と答えると、気を引き締めて私が先頭に立ってマニュアルに従い周囲を警戒する。

ツーマンセルの哨戒行動。私はフェイズガンのグリップを握り、フィデルはいつでも剣を抜けるように利き手を緊張させる。

どうやら着陸地点は、やや標高の高い海沿いの山の中腹のようだ。

耳を澄ますと微かに波の音も聞こえて来るので、海はすぐ近くなのだろう。

少し歩くとすぐに森が途切れ岩場に出た。

こんなところが本当に故郷にそっくりだ、と微笑むフィデルだったが、私はそんな彼に姿勢を低くするように言い、フィデルもすぐに気づいて剣の柄に手をかけた。

「また蟹ですか」

私が発見したものを見て、フィデルは苦笑する。

目の前に現れたのは、岩場に群れる大きな3体の蟹だった。

リーシュを追っていた蟹ほどではないが、甲羅の高さが人の腰ほどで両のハサミを広げた幅は成人男性の身長を越えているので、十分に大きな蟹である。

私が襟元のデバイスに合図をすると、コロの分析が返って来た。

『特殊な生態ではないと思われます。熱探知だけでも、甲殻はリーシュさんを襲っていたあいつとは比べ物にならないほど脆弱なものです』

つまり、大きな脅威ではない、ということだ。

『ですが、あのハサミはそれなりに強靱なようです。周辺に援護が現れそうな群れや巣が無いのなら、この惑星の生態サンプルとして有用ですので撃退をお願いできますか』

「では、お手並み拝見といきますか」

フィデルがすらりと剣を抜き、私もフェイズガンのトリガーに指をかける。

私が蟹の足やハサミを狙ってフェイズガンを発射。動きが鈍ったところをフィデルが順次切り捨てる。

ごく単純な作戦を伝えるとフィデルは了承し、この星最初の作戦が開始された。

私はフェイズガンを口径を絞って貫通力を重視したモードに変更して、素早く3体の蟹を撃ち貫く。

そのうち一体は、偶然にもハサミの付け根と胴体を一度に打ち抜き、苦鳴を上げてすぐに動かなくなった。

「お見事！」

すかさずフィデルが私の背後から風の如き速さで飛び出し、幅広の長剣をまるで重さなど無いように、目にもとまらぬ速さで振り抜いた。

私の第一射からものの十数秒。

そこには倒れ伏した3体の蟹の骸があった。

「これじゃ、鍛錬にもならないな」

フィデルは余裕を見せて剣を鞘に納めるが、その言葉とは裏腹に、フィデルの目は死角になっっている我々の背後の森や周囲の岩場を警戒し続けていた。

このこと一つとっても、彼がただの士官候補生でないことがよく分かる。

そして、その警戒はこのとき、きちんと生きていた。

フィデルの背後の岩陰から、新たな蟹が躍り出て来たのだ。

鉄板も断ち切りそうな巨大なハサミがフィデルの首を正確に狙うが、もちろんそれに慌てる我々ではない。

私は冷静にフィデルを狙うハサミを撃ち抜いて、フィデルも間髪いれずに剣を振るい、新

たな蟹を両断する。

「もう大丈夫そうですね」

私もフェイズガンのトリガーから指を離した。

「恐らくこの岩の隙間の崖下から蟹が上がって来るんですね。ここさえ気を付けていれば、あとは大丈夫じゃないかと」

フィデルが4体目の蟹が現れた岩の裏を覗き込むと、そこはかなり高低差のある崖になっていたので。

「でも変だな。他の蟹が全然見当たらない。あれだけの大きさなら隠れても見えないってことは無いと思うけど……群れの移動に取り残された奴らだったのか……ん？」

何か気になることがあるのか、フィデルはしきりに崖下を覗き込んでいるが、差し迫った脅威が無いのであればそれ以上は今も考えていても仕方がない。

とりあえず艦に戻ろう。

フィデルにそう声をかけて、フィデルも了承をしたそのときだった。

私は視界の隅に光るものがあるのに気づいた。

それは4匹目の蟹の死骸の、すぐそばにあった。

「艦長、これ」

フィデルもそれに気づいたのか、少し驚いたようだ。

「この蟹が作った砂団子ってわけじゃないですよ」

砂団子を作る蟹がいるのかどうかは知らないが、海辺の村出身のフィデルが言うのならそういう蟹もいるのだろう。

だが、多分砂団子は虹色に光ったりはしないし、こんなに精緻な紋章が刻まれていたりもしないだろう。

間違いない。これはあの岩と砂の惑星で見つけた石と同じものだ。そして。

「何ですか、艦長」

フィデルが、石と彼を見比べる私を見返してくる。

今日の前にいる青年と艦のオペレーター席に座っている女性を呼び出したとき、リーシュはこの石を握りしめていたのだ。

蟹の死体は後回しにして、今はこの石だけを持ち帰ることにし、私とフィデルは艦周辺の哨戒を終えたのだった。

「お疲れさまでした。やはり、周辺に危険な生物がいましたか！」

「周辺にいたというか、僕らが彼らの縄張りに入りこんでしまったって感じだったけどね」
こちらを心配するコロに、フィデルが少しバツの悪そうな顔で答える。

「ともあれ、森には危険な生物の痕跡は無かったし、とりあえず差し迫った危険はないと思う。それで、こっちは何か分かったのか？」

「はい！ よくぞ聞いて下さいました！ 解析の結果、新たな事実が判明しました！」

「あれからもう一度、遠近両方のセンサーを精密点検してみたんだけど、やっぱり異常は見当たらなかったの」

「そこまでして異常がないのなら、原因は外部的なものだと推定されました。そこで僕があらゆる可能性を探ってみたところ」

続けてコロが導き出した結論は、驚くべきものだった。

「この星のどこから、センサーの機能を妨げる妨害波と呼ぶべきものが発せられている、と結論づけました」

人口10万以上の都市や内燃機関が存在しないこの星から、連邦戦闘艦のセンサーを妨害する妨害波？

そんなことがあり得るのかと問うと、コロはその機能美溢れるらしいボディを左右に捻じる。多分本人的には首を横に振っているつもりなのだろう。

「そうなんです。この星の文明レベルでそんなことが起こるはずがないんです」

「だからね、安全に探索するにはまずその妨害波をどうにかしなきゃいけないって、残った3人で話し合ってたの」

リーシュが前のめりで言うのを見て、私は腕を組む。

妨害波とざっくりした表現だが、それ自体はそこまで大きな問題ではないように思われた。広域に計測機器をジャミングしていて、外に出た私やファイデルが物理的にセンサーの影響を遮断する物質や自身への何らかの影響を確認できなかった以上、正体は人体に無害な特定の周波数の電磁波であると推測できる。

ということは、センサーに干渉せずに妨害波に干渉する波をこちらから出してやればいいのか。

「仰る通りです！ 妨害波を妨害する妨害波妨害装置を作って妨害波がこちらに届くのを妨害するんです！」

「ねえ艦長。こいつワザとやってるわよね」

リーシュは早くも、コロの性格を把握したようだ。

「そして僕は既に妨害波妨害用の妨害波妨害装置を望外の早さで製作しあげちゃっ！」

ぼうがいぼうがいうるさいコロの尻にミュリアの指先から飛んだ雷が刺さり、我が艦の機能美溢れるインターフェースを誇るAIは悲鳴を上げて転がって行った。

「まだ周波数を厳密には合わせられていないけど、妨害波除去装置の試験機はコロがもう作ったわ。これをあちこちに設置して、少しずつセンサーの及ぶ範囲を拡大していくしかないでしょうね。これも結構気の遠くなる作業だけど、安全には替えられないわ」

ミュリアが取り出したのは、大人の掌に収まるほどのキューブ型の装置だった。

「もつとも妨害波を出しているものの正体や、それを設置した人間がいることを考えると、妨害波を遮断するのはそれはそれで危険かもしれない。探索は、油断せずにね」

「と、とりあえず……10機ほど……あります。1機で、半径2キロメートルほど、影響、します……ぐふっ！」

艦橋の隅で尻から煙を出しながら芝居がかった倒れ方をするコロは無視して、リーシュが手を上げた。

「艦長、フィデル、お願い。これの設置作業にあたしを連れて行ってほしい」

「え……でもそれは……」

ミュリアの不穏な予想を聞いたフィデルは難色を示すが、今度はリーシュが食い下がった。

「この惑星の姿をこの目で見たいの」

それは、リーシュの記憶に関係する何かがあるからなのだろうか。

「それもある。でもそれ以上にあたしはこの星の姿を見て、空気を肌で感じたいの。もう体は元気よ。艦長やフィデルの戦闘の足手まといにはならないわ。荷物持ちでも何でもする。危険なときには指示に従うって約束する。あたしの逃げ足は見たでしょう？ だから……」

私とフィデルは少し困ったように顔を見合わせるが、先ほどの蟹程度なら私のフェイズガンだけでも十分に対応できるし、この妨害波遮断装置でセンサーが復活すれば、コロのサーチで脅威を未然に感知することもできるだろう。

どうせ一日二日でこの星を出られるとは思っていないし、いつまでも艦の中に引きこもっていても仕方ないのは確かだ。

艦の防衛と整備のためにミュリアには残ってもらい、私とリーシュとフィデルで改めて周辺の探索に出て、今後の活動の試金石とした方がいいだろう。

「艦長がそう言うのであれば」

「ありがとう！ 絶対に役に立ってみせるわ！」

私の判断を伝えるとフィデルは了承し、リーシュは両手を掲げて喜びを露わにした。

リーシュを連れて未知の惑星の冒険に出る。

ここからが本番だ。

「はい！ 頑張りましょうね！ 艦長！」

いつの間にか復活していたコロの声に送られて、私達三人は、再びメーアの大地へと降り立ったのだった。

艦から降り立ったリーシュは、しばらくその場所で空を見上げ、大きく深呼吸をしていた。

私達と同じように遠くから聞こえる海の音に耳を澄まし、森のしっとりとした空気に微か

に漂う潮の香りも、敏感に感じ取っているようだ。

「素敵な星ね」

リーシュのその声には、万感の思いが籠っているように聞こえた。

私もフィデルも、少しの間だけリーシュのその感慨に付き合う。

軍人の性でそれでも周囲を警戒してしまうのはなんとも悲しいが、おかげで艦の周囲に脅威は無く、自然豊かな美しい環境が満ちているということだけは再確認できた。

「ごめんね。付き合わせて。それじゃあ」

大きく息を吐いたリーシュが、少しだけ照れくさそうに私とフィデルを振り返ると、背負った銀河連邦軍謹製汎用リュックサックから、妨害波遮断装置を一つ取り出し、艦のハッチのすぐそばに置く。

『遮断装置の起動を確認。感度良好。周辺に危険な生物や現象は確認できず。リーシュさんその調子です。装置の有効範囲は半径約2キロですから、3〜4キロほど歩いた時点で設置すると隙間なく妨害波を遮断できるので、どうかお氣をつけて』

「分かったわ！ 艦長、フィデル、行こう！」

先ほどと同じように私が先頭。フィデルがしんがり。二人でリーシュを挟んで守るようにして、とりあえず海があると思しき北東方向に向かって歩を進める。

センサーは使えなくても、宇宙から撮影した地形図はもちろん有効である。

コロから私の携帯型探査用端末『クオッドスキャナー』に転送されてきた地形図を頼りに、私達は慎重に森を分け入ってゆく。

湿り気を帯びた土の地面を針葉樹林の巨木の根が這い、思いのほか歩きにくい地面だ。

だが私がさりげなくリーシュの様子を窺うと、彼女はその細身に似合わず息が上がった様子も疲れた様子も見せず、まるで一步一步大地を踏みしめるのを楽しむかのように、明るい表情を崩していなかった。

私がリーシュを気にしていることに気づいたフィデルが、リーシュの背後から問題ない旨をただけで合図してきて、私は少し心強い思いで再び前方の動向に集中する。

そのまま30分ほど歩いたとき、襟元からコロの声が聞こえた。

『艦長。妨害波遮断装置の影響範囲ぎりぎりの所に、原始的に舗装された道路があります。現地住民の集落、村落、市街が近辺にあるかもしれません。お氣をつけて』

私はすぐにリーシュとフィデルにもその旨を伝え、少し移動のペースを落とさせた。

メーアの人類は遠距離スキャナーでスキャンできた範囲では、私達と変わらぬ類人猿を祖としたヒューマノイドだった。

だがこの地域に住まう人々が平和的な存在かどうかは分からないし、そもそも現状で我々は現地住民に接触しなければ生命維持が難しいという状況ではない。

可能な限り未開惑星保護条約を守るためにも、現地住民とのファーストコンタクトは慎重

に行わねばならない。

その後しばらくして、私達はコロが言っていた道へと出た。

舗装と言うより単に踏み固められただけの土の道だが、詳しく観察するまでもなく、大きな車輪による轍が刻まれていた。

この道は、どうやら現地住民が何かを輸送するために頻繁に行き来する道のようなのだ。

まださほど距離を稼げてはいないが、私はここでリーシュに、もう一つ遮断装置を設置するように言った。

今は無闇に探查範囲を広くするよりも、危険感知とそれへの対処を優先するべきだ。

リーシュは私が何も言わなくても、遮断装置を森の中の目立たないウロの中に、現地住民に簡単に発見されないように設置してくれた。

『感度良好です。あ、艦長』

するとすぐにコロが、新たな発見をしたようだ。

『そこから東に1キロほど歩くと、もう海岸線が見えるはずですよ。そこから先はかなり高低差のある崖を降りることになりますが……恐らくですがそこに、現地住民の集落があります』

「確かに村ね。見たところ、漁村みたいだけど」

「間違いないな。あそこ見てください、多分魚を開いて干物にしているんだ。……見たことの無い形の魚ばかりだ。あんまり美味そうじゃないな」

私達は、崖の上から問題の村落を身を隠しながら伺っていた。

海岸からさほど離れていない僅かな平地に張り付くように木造の家屋が密集し、背後に崖、正面に海を臨んで静かに生活を営んでいた。

『光学映像で村落を確認。概算ですが、村には200人ほどが生活しているようですね。少ないように思われますが、漁にでも出ているんでしょうか』

「いや。この日の高さで波の様子なら、もうとつくに漁は終わってなきや危ない。晴れてはいるけど風が強いから海面が荒れているし、近くの大きな町に出稼ぎにでも出ているんじゃない限り、それが村の全人口だと思う」

港町出身のフィデルの分析は、ここでは非常に頼りになる。

「店らしいものは、一軒しかなさそうね。泊まれる場所とかも無さそう」

リーシュが指さすのは、村の比較的中心に位置する雑貨屋のような場所だ。

それも分かりやすく看板が掲げられていたりするわけではなく、この星の野菜と思しきものが軒先に並べられているからに過ぎない。

「どこからお客が来たときには、村長や網元なんかの家に泊めるんだろうね。頻繁に旅人が来るような場所でもなさそうだし」

フィデルの分析も一切否定しようがなく、明らかに、この村だけで世界の全てが完結しているような、典型的な辺境の村落だ。

情報を集めようにも星の文明レベルを考えると、村長ですら、この星の世界情勢についてどこまで知っているかは怪しいものだ。

妨害波を発生させるような機械的な何かなど、存在すら理解してもらえないだろう。

そもそもそれ以前の問題として……。

「そうね。あたし達、いくらなんでも目立ちすぎるわね」

私もリーシュもフィデルも、自分達の出で立ちと、目の前の村に住まう人々の衣装を見比べれば、何をどう考えても警戒されるのは火を見るより明らかだった。

これは一度艦に戻って、現地住民風の衣装を製作する必要があるそうだ。

「それだけでどうにかなるかしら。なんか、全然馴染めなさそうなんだけど」

リーシュが言いたいことは分かる。

村の住民は、いずれも海の太陽と潮風に晒された健康的な小麦色の肌と、赤みがあった灰色の髪の毛、そして青灰色の瞳の持ち主であった。

服は誤魔化せても、そう言った生来の部分はどうにもならない。

「無理に馴染もうとするよりは、行商人か何かを装ってよそ者であることを隠さずに情報を買う方がいい気がします。さっきの宝石みたいな石を見せれば歓迎してもらえるかも……」

「宝石みたいな石？」

言われて、蟹を倒したときに手に入れたあの紋章が刻まれた石を、軍服のポケットに入れたままだったことを思い出した。

コロに解析を頼もうと思っていたその石を取り出した途端、リーシュが目を輝かせる。

「そ、それ、どこで手に入れたの!？」

私の手から奪い取らんばかりの勢いで飛び付いて来たリーシュを静かにさせるのに少し苦労したが、私はこの紋章が刻まれた石を、つい先ほどフィデルと倒した蟹から手に入れたと説明する。

「この星の生き物から……?」

リーシュは少し驚いていたようだが、すぐに真剣な表情をすると、私と石とを何度も見た。

「艦長、わがままばかり言うようで悪いんだけど、この石、あたしにももらえない?」

突然の申し出に、私は戸惑う。

全く違う惑星から全く同じものが採取されることなど、まず無いことだ。

だからコロに解析をさせようとしていたのだが、妨害波遮断装置の話題に妨害されてつい言いそびれていたのである。

「分かってる。解析を最優先にしてもらって構わないわ。でもこの石をあたしに使わせてもらえたら……きっと役に立てると思う」

リーシュは真剣だった。

今更リーシュが、ただ綺麗だからというだけでこの石を欲しがっているとは思わない。

そして、リーシュがことさらに『役に立てる』と強調することとは。

私は一瞬だけフィデルを見てから、改めてリーシュに向き直る。そして、今度は目の前で見せてくれるのか、と尋ねた。

リーシュは一瞬だけ目を見開いたが、

「うん！ 見せてあげるわ！ あたしの力！」

すぐに頬を紅潮させ、大きく頷いたのだった。

艦のレクリエーションフロアに、私とコロ、フィデルとミュリア。そしてリーシュが集まっていた。

レクリエーションフロアの中心にリーシュが立ち、まるで神への供物を祭壇に掲げる巫女のように、あの石を両の手でかざしていた。

スキヤンの結果、石自体の成分は宇宙中どこにもある不純物交じりの石英の結晶であり、精緻な紋章が刻印されていること以外は何ら変わったところは見受けられなかった。

少なくとも価値のある宝石や鉱石、レアメタルではないし、紋章が刻まれているからといって高エネルギー結晶ということもない。

だが今はどうだろう。

紋章術は門外漢の私にもはっきり分かるほど、リーシュの高められた紋章力があの石に集まっていることが分かる。

フィデルやミュリアはもちろん、何かと口数の多いコロですら、リーシュのその様を見て呆けたように黙ったままだ。

「始めるわね」

リーシュがそう言って、全員が固唾を呑んで推移を見守っていた次の瞬間、リーシュの手からあの石が離れて空中に浮かび、一瞬で砕け散った。

驚く間もあればこそ、砕けた石の破片がまるで紋章力を帯びた霧のようにリーシュの周囲に降り注ぎ、一際強い光の柱が立ち上り凝縮され、虚空から光の柱の色と同じ黄金色の円盤が出現した。

円盤はリーシュの紋章力に導かれ、レクリエーションフロアの地面に降り立ち、黄金色の虹を生み出す。

「彼の者を導け……光の道……！」

リーシュの、まるで宣言の如き詠唱とともに、それは唐突に出現した。

短く切りそろえられた金色の髪。

すらりと伸びた背と、シンプルなデザインながら機動性の高そうな装い。

意志の強そうな、青灰色の瞳。

光の柱も黄金色の虹も円盤も消え去った後に残ったのは、リーシュと同年代の女性だった。

「ふう、今度は完璧」

いつの間にか、あの膨大な紋章力は霧散し、黄金色の光の柱の中で女神の如き佇まいであったリーシュは、見慣れたいつもの彼女に戻っていた。

初めて出会ったときのように、唐突に倒れる気配も無い。

つまりこれが、リーシュの本来の力の顕現なのだ。

私達は、目の前で起きた事態にどう反応していいのか分からずただ立ち尽くしていた。

虚空から、人間が現れた。

そして恐らくフィデルやミュリアも、私とコロが見ていないところでこのようにして呼び出されたのだろう。

そして二人の例になれば、新たに現れたこの女性もまた、この宇宙のどこからリーシュの紋章術により『呼び出された』ということになる。

「ここは……」

女性が目を開けて最初に目を合わせたのが私だった。

こうなると、艦の責任者として、私が挨拶をせねばならない。

すると、先に口を開いたのは女性の方だった。

「とてつもなく大きな施力【せりよく】に呼ばれたことは、分かりました。私を呼んだのは、あなたですか？」

女性は、フィデルやミュリアと同じように、自分がこの場に來た理由自体は理解し納得できているようだ。

それはそれで奇妙なのだが、女性は私の疑問は意に介さず、ぼんやりと周囲を見回す。

「何だか、とんでもない場所に呼ばれたみたいですけど……でも、私の力が必要とされているということは、分かります。何かできることがあるのなら、私にお任せ下さい」

そう力強く宣言し、女性は名乗った。

「私は聖王国シーハーツの隠密部隊、封魔師団『闇』二級師団員、タイネーブと申します。よろしく願います」